

この町でキラリ☆  
 だいたいま修業中

「長崎に昔あった洋食屋の場所は」「五島にある教会について知りたい」。カウンターに向こうから寄せられる図書館利用者の依頼は幅広い。会話を交わしながらキーワードを見つけ、約56万冊の蔵書から必要な資料を引っ張り出す。お目当てにたどり着けたときの相手の笑顔がうれしい。情報と人とを結ぶ「仲人」役を担っている。

長崎市出身。人と話すことが子どもの頃から好きだった。会話しながら相手の心にするりと入り込むことはちよっぴり得意。接客業をしたいと思っていたが、大学時代のアルバイトがきっかけで、そのまま市立図書館に就職。電話応対や貸し出し業務を経て4年目の今春からレファレンス業務に就いている。

長崎市立図書館司書

=長崎市浪の平町=

もり森 さん(25)



利用者と話しながら、必要な情報を探す森さん。長崎市興善町、市立図書館

情報と人結ぶ「仲人」

レファレンスサービス  
 図書館利用者が必要とする情報や資料などを求めたときに、職員が情報そのものや、そのために

メモ

必要な資料を検索し、提供・回答する業務。本の貸し出しと並んで、図書館業務の中核的な業務の一つとなっている。

く見つけられない人もいる。そんな人たちから頼りにされているのが司書だ。何か質問されると、まず開くのは百科事典。実は知りたいことのかなりの部分が載っている。

「親子関係についての本はありますか」と尋ねてきた高齢の男性。データベースで探すと、育児本のタイトルがずらりと並ぶが、これではなさそう。やりとりを重ねながら、検索キーワードを絞り込み、探し当てていく。「論文を書きたいので人工生殖と親子関係についての資料がほしい」。医療関係に絞って探し、カウンターと書棚とを往復。数冊の書籍を持ってきた。さらに文中に参考資料が載っていることや、論文を読めるインターネットのサイトも紹介。「ありがとう」。感謝の言葉が糧となる。

利用者が帰った後に、もつとびつたり合った資料を見つけたときは、悔しい。だから検索の精度を上げようと練習を繰り返して多くの資料に触れ、司書の技量を鍛えている。図書館の情報の宝庫としての役割をもっと多くの人に活用してほしい。そう願いながら、今日も笑顔で利用者を出迎える。

(永江倫子)